

医学部や附属病院の敷地内で活躍する「徳明会」の名称由来をご存知ですか？

徳明会は、売店・ローソン、喫茶室、食堂、理容・美容室、簡易郵便局、病棟の洗濯機・乾燥機・テレビ・冷蔵庫・公衆電話・自動販売機・コインコピー機など幅広いサービスを提供しており、植樹やエコクリーンデーの際に、職員や学生・院生に飲物のご寄付をされます。このように医学部や附属病院の敷地内で活躍する「徳明会」の名称由来について、ご紹介いたします。

首里出身の高嶺徳明（1653年～1738年）は、10歳にして福州にわたり、言葉を習い、29歳にして進貢使人の通事として活躍しました。当時の琉球王 尚貞の孫 尚益は生来の口唇裂で将来王位の継承が心配されていました。ときに徳明は福建省に口唇裂の名医（黄会友）を知り秘法を学びとり、1689年5月に帰国して、その年の11月王孫 尚益の治療にあたりました。全身麻酔術を施して手術を行い、痕跡を留めぬくらいに成功し、尚益は33歳で12代王位につきました。

近代医学の革命の一つと言われ、外科学の進歩に新紀元を画した麻酔法は、1846年エーテル麻酔に始まりますが、これは徳明より157年も後のことであり、日本医学史に特記されるべき功績です。病院に事務所がある後援財団を「徳明会」と称し、永遠に高嶺徳明先生の功績をたたえ、後身の励みに貢献しています。



医学部がじゅまる会館と保健学科棟の中央部に位置しています。